

〔原 著〕

## 高齢者の「人生設計課題」における知恵

—「成年課題」の試み—

筑波大学心理学研究科：盧 怡慧

Older Adults' Wisdom: Assessment by "Young/Middle Adult Life-planning Task"

Lu I-Kei

### 問 題

近年、高齢者を対象にする研究の必要性が高まり、心理学の分野にも、高齢者の知的特徴を捉えることを目的として、知恵 (Wisdom) の研究に注力している。

これまでの知恵の心理学的研究には、概念を明らかにするための研究として、Clayton (1980) らの人の知、情、意の統合的な働きであるという見方もあれば、Stenberg (1985) らの単なる知的能力として捉えた観点もあり、また、Holiday & Chandler (1986) らの性格の側面まで含め、幅広い諸能力として捉える見方もあった。その他に、Kitchener & Brenner (1990) は知恵に4つの重要な側面があることを見出した。それは人生に不可避かつ困難な問題への認識、問題への深く幅広い理解力、知識の不確実性への認識、難しい課題への実行可能な判断能力である。一方、実証的な研究として、知恵を日常的問題解決の思考力として捉えてきた Baltes の知恵と関わる知識 (wisdom-related knowledge, Baltes & Smith 1990, 1994, 1995) が中心的な役割を担っている。Baltes らは知恵を「人生の基本的な実践についてのエキスパートの知識である」(Baltes, 1990) と定義し、次の5つの知恵指標を提示した。1. 事実に基づく知識 (Factual Knowledge), 2. 手続き的知識 (Procedural Knowledge) 3. ライフスパンの文脈論 (Life-Span contextualism) 4. 不確実性への処理能力 (Uncertainty) 5. 価値相対論 (Value relativism)。これらの指標によって、人間の

「人生設計課題」に関する解決方法が評定され、その得点を「知恵得点」として一連の研究が進められてきた。

しかし、Baltes らの研究で用いた人生設計課題には、西洋社会の文脈から生み出すものであり、日本人被験者には想像しにくい問題があり、その課題の日本での適応性が検証されていない。そこで、国内には、盧 (1998, 2001) は知恵を「人生の実際的な問題について、適切に対処するための理解力、判断力、洞察力などの知的能力」と定義し、高齢者にまつわるライフイベント及び日本人の生活上起こりうる葛藤を中心に、日本人に適した「人生設計課題」を作成しました。世代別の比較には、高齢者が大学生よりも優れた成績を挙げたなどの結果が示された。

ただし、盧 (2001) の研究は、高齢者における知恵の特徴を明らかにすることを目的としていたため、高齢者の多様な回答を引き出すことを考慮して、比較的高齢者に身近な課題を選定した (以下は「老年課題」)。そのため、大学生との比較で高齢者の成績が優れていることは老年課題の妥当性を裏付けできる。しかし、知恵と経験の密接な関係を示したこの研究の結果は、重要な意味を持つと思われるが、高齢者の知恵の一側面しか明らかにしていないとも言える。

また、多くの研究には、知恵に「難題に対する判断力」、および「年齢を重ね、経験豊かであり、人生の問題を大きな文脈の中で把握することができる」のような実用的、日常生活に密着している特徴を指摘する。すなわち、知恵という熟練とした知的能力は、加齢及び経験の積み

重ねとともに、多様な問題解決を数多く体験することによって、発達していくことが想定されている。そこで、どのような経験は知恵の発達に影響するかについて、「老年課題」を用いて調査することに重点をおく。盧（2001）の研究は、1.学歴の違いによる知恵得点の差は示されていない、2.職業経験は知恵の「事実に基づく知識」などの側面に関連している、読書、新聞購読、地域活動などの生活経験は知恵と深く関連している、との結果が明らかになった。

しかし、知恵と関連していると報告された地域活動、読書、新聞購読の生活経験からすれば、「老年課題」のテーマ高齢者の実生活に身近な課題であり、その内容も現時点の生活と密接している、普段から興味や関心を持ち、現在の生活パターンと知的習慣によって日々思索していると思われる。

これを踏まえ、課題に制約を受けない知恵を測定するために、知恵と経験との関連性を補完的に検証するためにも、多様な課題を取り上げ、課題の性質による影響も含めて知恵尺度を充実する必要があると考えられる。

本研究は、Baltesら及び盧の延伸として、青年から成人までの幅広い年齢層の主人公を取り入れ、新たな「成年課題」を開発することを試みた。そこで、高齢者は、実生活の関心に離れた若い年齢層の難題に対して、果たしてどのような答えが出るか、を検証することを目的とした。また、知恵と経験との関連が、課題への馴染みを取り除いた条件の下で、どう示されるかどうかを確認することは、高齢者の知的能力に、現在の生活パターンや知的習慣の影響を検討する上、重要な課題と考えられる。そこで、先行研究と同様に、本研究は「地域活動、読書、新聞購読」について、「成年課題」に対する知恵の得点との関連性を検討し、高齢者の知恵を測定するとともに、知恵への影響要因を見直し、日本における知恵尺度の充実を図ることを目的とする。尚、先行研究の盧（2001）の研究では、すべての被験者が10年から17年までの比較的長期かつレベルの高い教育を受けていた。教育経験上同質とされて被験者の教育経験の差が知恵

得点に対する影響が表に出てこない、もっと異質な教育経験を持つ被験者なら、知恵得点の差が見られるかもしれない、との指摘も受けかねないであろう。本研究では、教育年数が大きく離れた、より幅広い教育程度を持つ被験者に対して知恵課題を実施し、さらに教育経験と知恵の関連を検証することを次の目的とする。

## 方 法

**被験者** 千葉県在住の63才から90才までの高齢者51名（男24名、女27名、平均年齢76才、SD=7.09）。3名の高齢者以外には既婚である。現在の居住状況については、31.4%が夫婦子供及び子供夫婦と同居、21.6%が配偶者と同居であり、9.8%が一人暮らしであった。教育程度は、小学校が43.1%、中学校が7.8%、旧制高校卒業または女学校卒業が31.4%、旧専門学校卒業が9.8%、大学卒業が7.8%であった。もっとも長く就いていた職業（最長職）については、農業などの自営業が27.5%、事務職が9.8%、管理職、技術職、公務員または学校教員が各7.8%、サービス業または業務職が各3.9%、福祉または金融関係がそれぞれ2%であり、19.6%（すべて女性）が一度も職に就いたことがなかった。

なお、被験者の基本的言語能力については、施設の責任者あるいは紹介者の方において判断を行った。

**調査期間** 1998年11月下旬から12月下旬まで。

### 手続き

1) 家庭訪問及び施設内での個別面接法。一人に要した時間は30分から2時間。回答はすべて録音された。

2) 「生活経験」調査は質問紙によって行なわれた。質問紙は、年齢、性別、職業経験、地域活動、読書、趣味などの14項目から構成されている（大川，1989）。

### 材料

1) 人生設計課題 心理学を専門とする大学教員2名及び発達心理学を専攻する大学院生により作成した複数の課題の中から、本研究の目的に適した次の2課題を選定した。場面1では、

20代の職業をもつ女性の妊娠にまつわる問題であり、主人公と夫の対立場面を設定した。場面2は、転職が決まった中年男性、単身赴任の決断に迫られたことをテーマとした課題であった。本研究で用いた課題の内容をTable 1に示した。

2) 評定の手続き 評定者は心理学専攻の大学院生と大学生10名であった。一人の評定者は5つの指標のうちの1つの指標を担当した。すべての評定者が本研究における評定の指示と基準に熟達したうえで、評定を行った。

評定者が、回答の内容を読み、担当した知恵指標について得点化した。評定は7件法で行い、得点が高いほど回答の質が高いことを示す。

3) 評定基準 回答文は以下の評定対象と評定基準に基づいて、指標毎に得点化された。

- (1) 事実に基づく知識：「専門のおよび特殊な知識」と定義される。本・新聞などに書かれているような知識を豊富に持っており、その知識を場面に応じて、専門用語あるいは具体例を用いて論理的かつ詳細に説明したものが知恵のある回答とされた。本

評定基準及び評定の例をTable 2に示した。

- (2) 手続き的知識：「実用的、具体的な解決策と方法の考案」の箇所を評定の対象とした。多数の実行可能な選択肢を提示し、さらに、具体的な手続きなどについて詳しく説明したものが知恵のある回答とされた。
- (3) ライフ・スパンの文脈論：問題文に示されていない情報が、すなわち「登場人物の性格、健康、経済状況、動機、人間関係、生活環境、年齢、家族構成などについての言及」を評定の対象とした。
- (4) 不確実性への処理能力：「問題発生の可能性、予測やコントロールできないことへの気づき」を評定の対象とした。適切と思われる選択や決定をしたとしても人生には不確実性があるという点への理解が求められた。
- (5) 価値相対論：「人生の価値観や優先性には個人によって差異があることを認識しており、他人の立場を考慮すること」を示した箇所を評定の対象とした。

Table 1 本研究で用いた人生設計課題—成年課題

場	面
1.	鈴木さんは、現在夫婦二人（20代後半）で生活していて、共働きです。鈴木さんは最近、長年あためてきた企画が採用され、その担当を任せられました。しかし、鈴木はどうやら妊娠したようで、子供のことを巡って、二人の考え方が対立しています。鈴木さんの夫は、これを機に仕事をやめて専業主婦になってほしいと思っているのですが、鈴木さんは仕事にやりがいを感じるので、これからも続けたいと思っています。
2.	田中さん（43歳、男）は、共働きの妻と高校生の娘をもつ会社員です。このたび突然転職が決まりました。今の土地には5年前に家を建ててローンがまだ残っているのですが、新しい土地に永久配属になりそうです。田中さんは家族で引っ越すか、単身赴任するか迷っています。

注. 教示は以下のとおりである：「幸せな生活を送るには、周りの人の支え（アドバイス、助言）が大切だと言われています。次のような悩みを持った方が相談してきたとしたら、あなたなら、どのようなアドバイス、助言をしてあげますか」

Table 2 「事実に基づく知識」の評定基準及び回答の例 —成年課題における転勤場面—

得点	基準	回答の例
7	家の売買賃貸、ならびに会社勤めの常識について、高度な専門的説明を、具体例をあげながら示している。	今日本の不動産は、下落してるわけですよ、だからローンが残ってて、売らなきゃならない、売るとなれば結局、相当な損失が出ますよね... (中略) ...もう5年経つと、建物の価値というのはガクッと落ちちゃうですよ... (中略) ...。40代という年代の人たちは、かなりのベテランですよ、いわゆる中堅幹部、会社のないものもかなり知り尽くしていると思う、だと、それをあえて他へ転動しなければいけないという、会社の事情の厳しさというのはそこにあるよね。これは転動せざるを得ない。
6	家の売買賃貸、会社勤めの常識の両方について、ある程度専門用語を用いながら詳細な説明を行っている。	転動するのは、会社の事情が厳しいから...普通は左遷と考えるでしょう (中略) ...。5年前組んだローンでしたら、また利息しか払ってない、元金はまたそのままでしょうね... (中略) ...。
5	家の売買賃貸、会社勤めの常識の両方について説明を行っている。さらに、どちらか一方については、ある程度専門用語を用いながら詳細な説明を行っている。	5年前組んだローンでしたら、また利息しか払ってない... (中略) ...元金はまたそのまま... (中略) ...。 転動するのは、会社の事情が厳しいから... (中略) ...。
4	家の売買賃貸、会社勤めの常識のどちらか一方ではあるが、ある程度詳細な説明を行っている。	今日本の不動産は、下落してるわけですよ、だからローンが残ってて、売らなきゃならない、売るとなればあまりお金にならない。それより家を人に貸して、家賃の取り上げは親戚に頼んで、家賃の1,2割を、親戚の人にまわり貸としてあげれば... (中略) ...。
3	家の売買賃貸、会社勤めの常識の両方について簡単に言及している。	土地を借りてるものよりか、買っちゃった方が得だろう... (中略) ...。転動とすると、普通社宅を手配してくれるじゃない。
2	家の売買賃貸、会社勤めの常識のどちらか一方について簡単に言及している。	ローンがあると、売るのは難しい... (中略) ...。
1	家の売買賃貸、会社勤めの常識についてまったく言及していない。	

結果と考察

学び取ったものと考えられ、知恵の重要な特徴であるといえよう。

1. 回答所要時間、評定者間の一致率、高齢者における知恵得点

2つの課題場面の回答所要時間は4分5秒から43分4秒(平均18分55秒)であった。回答に対する得点化について、評定者間の一致率は60%から74%であった。したがって、回答の得点化はある程度の信頼性が認められたと言えよう。

高齢者の回答について得点化した結果、全体的知恵得点3.0であり、指標毎においては1.9から3.5の範囲にあり、最高点の7点に達する回答は5%未満とわずかであった(Table 3)。その中でも、「手続き的知識」、「ライフ・スパンの文脈論」、「不確実性への処理能力」が高いことがわかった。そのことから、日常生活の難題について考える際、具体的な解決策の提示だけではなく、主人公のライフスパンと置かれる環境についても、多様な視点から配慮し、より深く深い回答に結び付けるができるであろう。このような能力は、高齢者の長い人生の経験から

2. 場面間及び指標間の相関

本研究で用いた成年課題を検討するため、5つの指標の得点を平均した「指標総合得点」を用いて場面間の相関を調べた。結果は両場面の間に有意な相関が示された(Table 4)。また、指標毎に場面間の相関係数を求めたところ、すべてにおいては相関が見られた。特に「ライフ・スパンの文脈論」および「価値相対論」の指標において、それぞれ.84と.70の高い相関が示された(Table 5)。以上述べたように、本研究では2つの課題場面の間には高い相関が示されたことから、高齢者は異なる人生難題においても、一貫して「人生の実際的な問題について、適切に対処するための理解力、判断力、洞察力などの知的能力」を広く働かせ、アドバイスを行っていたと考えられる。

さらに、2つの課題場面の得点を平均した「課題総合得点」を用いて指標間の相関を調べた結果、すべての指標の間に有意な相関が示され

Table 3 高齢者における知恵尺度得点の平均と標準偏差

		高齢者
場面1 (妊娠課題)	1. 事実に基づく知識	2.06(1.29)
	2. 手続き的知識	3.96(1.73)
	3. ライフ・スパンの文脈論	3.60(1.74)
	4. 不確実性への処理能力	3.14(1.92)
	5. 価値相対論	2.61(1.71)
場面2 (単身赴任課題)	1. 事実に基づく知識	1.67(1.19)
	2. 手続き的知識	3.04(1.75)
	3. ライフ・スパンの文脈論	3.47(1.91)
	4. 不確実性への処理能力	3.57(1.90)
	5. 価値相対論	2.61(1.89)
課題総合得点	1. 事実に基づく知識	1.86(1.07)
	2. 手続き的知識	3.50(1.53)
	3. ライフ・スパンの文脈論	3.54(1.75)
	4. 不確実性への処理能力	3.35(1.70)
	5. 価値相対論	2.61(1.66)
全体的知恵得点		2.97(1.35)

Table 4 人生設計課題における場面間の相関 —成年課題—

場面1と場面2の相関	
指標総合得点	.81**
1. 「事実に基づく知識」	.49**
2. 「手続き的知識」	.53**
3. 「ライフ・スパンの文脈論」	.84**
4. 「不確実性への処理能力」	.58**
5. 「価値相対論」	.70**

\*\*p<.01, \*p<.05

た (Table 5)。特に、「ライフスパンの文脈論」と「不確実性への処理能力」、及び「ライフスパンの文脈論」と「価値相対論」との間、.80及び.89の高い相関が見られた。また場面毎に指標間の相関を検討したところ、同様な結果が見ら

れた。

Baltesの先行研究には、本研究と同様の5つの指標を用いて高齢者の知恵を測定した結果、指標間には.79 (ライフスパン, 価値相対論) から.87 (ライフスパン, 不確実性への処理) の高

Table 5 人生設計課題における指標間の相関 —成年課題—

	1	2	3	4
1.事実に基づく知識	-			
2.手続きの知識	.69**	-		
課題総 3.ライフ・スパンの文脈論	.63**	.66**	-	
合得点 4.不確実性への処理能力	.60**	.68**	.80**	-
5.価値相対論	.63**	.60**	.89**	.75**
<hr/>				
1.事実に基づく知識	-			
2.手続きの知識	.62**	-		
場面1 3.ライフ・スパンの文脈論	.58**	.65**	-	
4.不確実性への処理能力	.57**	.57**	.67**	-
5.価値相対論	.45**	.45**	.74**	.58*
<hr/>				
1.事実に基づく知識	-			
2.手続きの知識	.69**	-		
場面2 3.ライフ・スパンの文脈論	.57**	.54**	-	
4.不確実性への処理能力	.49**	.56**	.81**	-
5.価値相対論	.46**	.48**	.87**	.77**

\*\*p<.01, \*p<.05

い相関が報告された。彼らは、用いられた指標は「知恵」という一つの統合的概念を反映していることである、と結論つけた (Baltes, 1990)。本研究の結果からにも、知恵尺度の各指標によって測定された高齢者の知恵には、一つのまとまりと見られ、本研究における知恵尺度の一貫性が示されることといえよう。

### 3. 性差について

性別によって高齢者の知恵に差が示されるかどうかを調べるため、全体的知恵得点、及びすべての場面を平均した「課題総合得点」を用い、t検定を行ったところ、男女間の有意差がみられなかった。さらに場面毎に分析を行った結果、場面2における「事実に基づく知識」のみ有意差が見られました ( $F(49)=23.88, p<.05$ )。男

性は女性よりも得点が高かった。

本研究で用いた課題の内容から検討すると、男女間に有意差は示されないものの、次のような特徴が見られる。妊娠を主題とした場面1において、わずかながらも女性の方がより優れた得点を挙げた、それに対し、単身赴任を主題とした場面2のほとんどの指標においては、男性の方がやや優れた得点を見せられた。その中でも、「事実に基づく知識」においては、男性の2.08は女性の1.29より有意に高い得点を挙げられた。結果から、全体的には知恵と性別の間の関連が認められないが、男性と女性はそれぞれ異なった分野の体験を積むことによって、異なった知恵の様相を示されることが見られる。このことから、知恵と経験との密接な関係をさらに検証されたと言えよう。

#### 4. 教育年数と知恵との関係について

教育年数には人生設計課題における知恵に影響するかどうかを調べるため、教育年数と知恵得点の関連を調べた。今回の研究には、全ての被験者の総教育年数は3年から16年であった(平均9.71年, SD=7.09)。そこで、教育年数の8年及びそれ以下の群を「高校まで」(計23名)とし、9年及びそれ以上の群「高校以上」(計28名)に分け、知恵得点の比較をした。

まず、全体的知恵得点について、2群の差を比較したところ、有意差が見られた ( $t(49) = -4.54, p < .01$ )。指標ごとにみると、「事実に基づく知識」、「手続き的知識」、「ライフスパンの文脈」「不確実性への処理能力」及び「価値相対論」のすべてにおいて有意差が見られた。いずれにも「高校以上」は「高校まで」よりも高い成績が示された(順に,  $t(49) = -2.59, p < .05$ ;  $t(49) = -4.10, p < .05$ ;  $t(49) = -4.26, p < .01$ ;  $t(49) = -4.12, p < .05$ ;  $t(49) = -3.68, p < .05$ )。

さらに、両課題場面についてt検定を行った結果、場面1における知恵得点の差には、「事実に基づく知識」以外に有意差が見られた(順に,  $t(49) = -2.99, p < .01$ ;  $t(49) = -3.36, p < .01$ ;  $t(49) = -2.85, p < .01$ ;  $t(49) = -3.01, p < .01$ )。場面2においては、すべての指標において、有意差が見られた(順に,  $t(49) = -3.42, p < .01$ ;  $t(49) = -3.87, p < .05$ ;  $t(49) = -4.87, p < .05$ ;  $t(49) = -4.12, p < .01$ ;  $t(49) = -3.40, p < .01$ )。

先行研究には、最終学歴の大卒程度群と高卒程度群の間にほとんど差異が生じていなかった(盧, 2001)。しかし今回の結果には、教育年数8年以上の「高校以上」と8年以下の「高校まで」の間の差が示された。ある程度高いレベル以上の教育経験になると、知恵には直接に関連していないことと言えよう。このことから、知恵には、ある程度の教育によって訓練された基本的知的能力が必要ではあるか、大學レベルの専門的分野や幅広い文化的教養にはかならずしも必要でないことがわかった。むしろ、学校に出でから、成年以降の社会領域で色々経験し、

人生における難題の解決に必要な思考力と解決力に身につけることができるであろう。すなわち、人生のエキスパートになるには、大學などの高度な教育を受けることは一つの選択肢であるにすぎない。

#### 5. 生活経験との関連

本研究には、高齢者の「読書」、「新聞購読」、「地域活動の参加」を現在の生活パターンとして挙げ、知恵の各側面との関連を調べた。また、先行研究とは同様に、知恵との密接関連が見られるかどうかを検討することによって、老年課題と成年課題の特性を併せて検証する。

**読書** まず、知恵得点において読書する群としない群をt検定により比較した結果、全体的知恵得点について、読書する群はしない群より有意に得点が高かった ( $t(49) = 2.39, p < .05$ )。指標ごとにみると、「事実に基づく知識」、「手続き的知識」に有意差がみられた(順に,  $t(49) = 2.65, p < .05$ ;  $t(49) = 2.56, p < .05$ )。

この結果から、読書は高齢者の生活に、新しい情報を取り入れる有効な手段の一つであり、本から得られる知識は実生活の課題解決に役に立つこともあると思われる。そのため、知識の活用と関係する「事実に基づく知識」「手続き的知識」の指標においては、読書活動の影響が大きく見せられた。しかし、読まれる本の種類や性質にも関連していることが考えられるため、さらに本の種類、及び、読む時間の長さについて検討することが必要であろう。

**新聞購読** 新聞を読む群と読まない群は、知恵得点に差を示されるかどうかを調べるため、t検定を行った。全体的知恵得点について、有意差が見られた ( $t(49) = 2.95, p < .01$ )。新聞を読む群は読まない群よりも得点高かった。指標ごとにみると、「事実に基づく知識」、「手続き的知識」、「ライフスパンの文脈」及び「価値相対論」に有意差がみられた(順に,  $t(49) = 3.43, p < .01$ ;  $t(49) = 2.86, p < .01$ ;  $t(49) = 2.92, p < .01$ ;  $t(49) = 2.64, p < .05$ )。

結果から、新聞を読むことにより「事実に基

づく知識」を獲得し、人生設計課題の解決にその知識を活かしていることがわかった。また、読書には見られなかったが、「ライフスパンの文脈論」及び「価値相対論」においては、新聞購読との関連が見られた。本研究で用いられた成年課題の場面設定からみると、ローンや単身赴任、及び女性の生き方や育児などのことに関係しており、新聞にもよく登場する話題であったため、新聞を読んでいる人のほうがライフスパンの文脈を想像しやすかったものと思われる。また、新聞に登場するのは、実社会の実人物に基づく話しは多いため、読書よりは主人公に親しみを持ち、共感しやすいことが考えられる。結果から、新聞は高齢者の知恵に対する大きな影響を及ぼしていることが証明された。

**地域活動** 地域活動に参加と非参加の両群をt検定により比較した結果、全体的知恵得点について、有意差が見られなかった。指標ごと

も、地域活動を参加する人は参加しない人よりもわずかに優れた成績を挙げていたが、有意差がみられなかった。

先行研究には、ライフスパンの文脈論などの各指標で、地域活動との関連が示されたが、今回は異なる結果になる。総合して見ると、「老年課題」の場合、地域活動の影響が大きいと見られるが、「成年課題」には地域活動の影響が見られないことである。この結果には、高齢者が参加した地域活動の性質に関係していると思われる。本研究の調査によると、高齢者がよく参加している地域活動には、福祉関係のボランティア活動、ゲートボールなどの体育活動、及び町内会が一番多く挙げられた。次は、地域のふれあいの場で開催されたお茶会や文芸教室などが挙げられた。これらの活動において、参加者は同年代の方が多く、自分と異なった年齢層の人たちとの交流は比較的少ないことが現実で

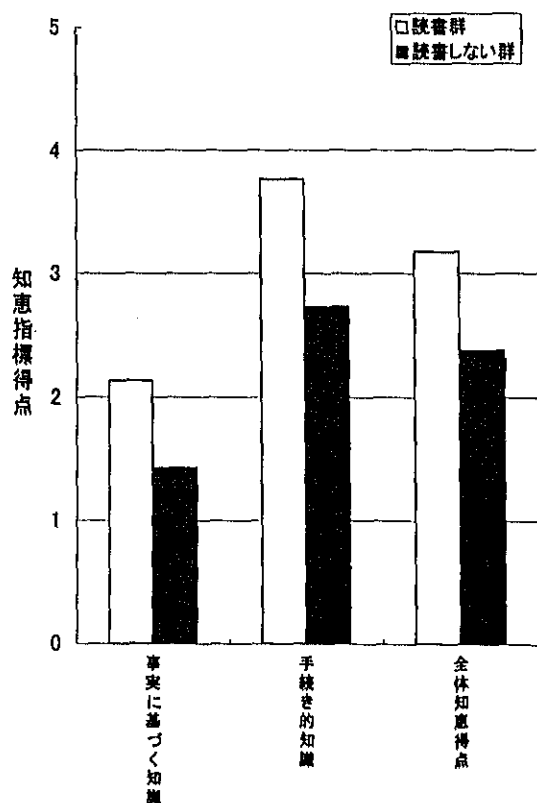


Figure 1 読書群としない群の比較



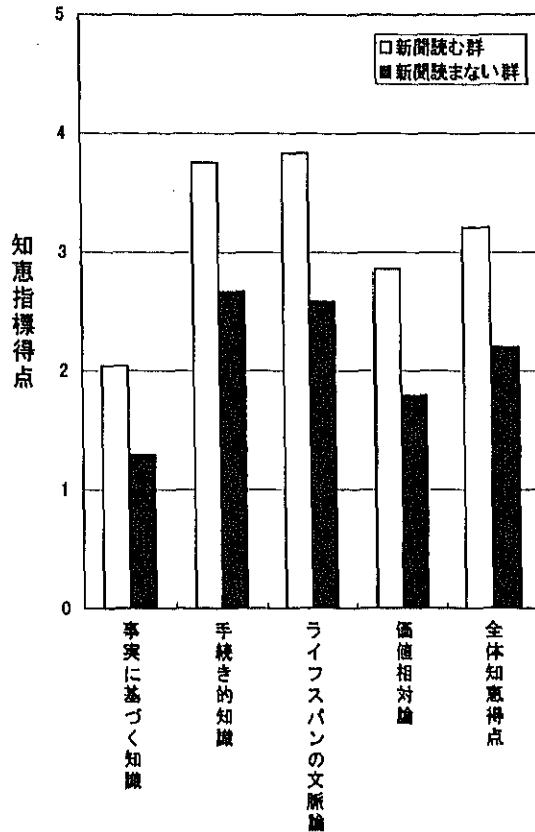


Figure 2 新聞を読む群と読まない群との比較

ある。そこで、高齢者は福祉関係のボランティア活動などを参加することによって、同じく高齢者たちの困難と心配事にさらによく理解をし、そのことは老年に起こりうるイベントを主題とした「老年課題」の回答に役に立っているのである。それに対し、20代の女性などの人生ジレンマ難題には、人との直接的な繋がりよりも、読書、新聞購読など方略によって、知識を取り入れることが多いであろう。

以上の結果から総合してみると、「成年課題」において、高齢者の知恵得点と教育歴及び現在の生活パターンとは深く関連している。その関連には、「老年課題」の場合とは同様に密接であり、知恵の各側面に著しく影響していることがわかった。そのことから、高齢になっても、さまざまな知的活動を積極的に取り組み意欲と習慣を持つことは、知的能力を保つことに有益であり、また、新しい情報の吸収により、自分の

経験を増やし、広く深い思考力を養うことができ、馴染みのない課題についての理解を深めることができたであろう。そのため、高齢者には、現在の生活に関連しているテーマだけではなく、それ以外の課題に対しても、高い知恵得点を示してくれた。

#### まとめと今後の課題

以上の結果から、本研究における成年課題は、幅広い年齢層の問題と葛藤を含むにもかかわらず、高齢者はそれぞれの主題に対し、主人公の多様な人間関係及び直面する問題点を考慮し、人生の多彩なシナリオを想像し、具体的な解決策を練りだすことができたであろう。このような能力はまさに人生経験によって積み重ねてきた結晶と言えよう。また、課題間及び指標間の相関が高いことから、本研究で用いた成年課題

には、ある程度の妥当性が証明されたであろう。今後の課題としては、老年課題を用いた先行研究には、高齢者は大学生よりも高い成績を上げられたことが証明されたが、本研究で作成された成年課題についても、高齢者と大学生との比較も必要と思われる。先行研究において、老年課題に対する馴染みが、高齢者群と大学生群の間に知恵得点の差をつけたかどうかの検証をするため、成年課題を用いた高齢者群と大学生群の対照的実験は、「課題年齢と被験者年齢との関連」を含めた知恵課題の検証と充実にとって必要と思われる。また本研究の結果から、「成年課題」における知恵尺度、及び「成年課題」と「老年課題」との併用は、さらに高齢者の知恵の理解に役に立てるであろう。

#### 引用文献

- Baltes, P. B., & Smith, J. 1990 Wisdom-related knowledge : age/cohort differences in response to life-planning problems. *Developmental Psychology*, **26**(3), 494-505.
- Baltes, P. B., & Smith, J. 1994 Occupational settings facilitating wisdom-related Knowledge: the sample case of clinical psychologists. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **62**(5), 989-999.
- Baltes, P. B., & Smith, J. 1995 People nominated as wise : a comparative study of wisdom-related knowledge. *Psychology and Aging*, **10**(2), 155-166.
- Clayton, V. & Birren, J. E. 1980 The development of wisdom across the life-span: a reexamination of an ancient topic. In P. B. Baltes & O. G. Brim (Eds.), *Life-span development and behavior*. Vol. 3. New York : Academic Press. pp. 103-135.
- Holliday, S. G., & Chandler, M. J. 1986 *Wisdom: explorations in adult competence*. Basel, Switzerland: Karger.
- Kitchener, K. S. & Brenner, H. G. 1990 Wisdom and Reflective Judgement: Knowing int face of uncertainty. In R. J. Sternberg (Ed.), *The nature of creativity: contemporary psychological perspectives*. New York: Cambridge University Press. pp. 212-229.
- 盧 怡慧 1998 高齢者の知恵に関する研究 1997年度修士論文 未公開
- 盧 怡慧 2001 高齢者の「人生設計課題」における知恵—特性の解明及び生活経験との関連— 教育心理学研究, **49**, 198-208
- 大川一郎 1989 高齢者の知的能力と非標準的な経験の関連について 教育心理学研究, **37**, 100-106.
- Saudinger, U. M., Smith, J., & Baltes, P. B. 1994 *Manual for the assessment of Wisdom-related knowledge*. Berlin: Max Planck Institute for Human Development and Education.
- Sternberg, R.J. 1985 Implicit theories of intelligence, creativities, and wisdom. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**(3), 607-627.